phantom

那緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｐｈａｎｔｏｍ

【Ｎコード】
Ｎ３５６５Ｍ

【作者名】
那緒

【あらすじ】
僕は思ったんだ。
この世界がもしも誰かの手によって創られたものなら
今、僕がここにいるのも
今、僕が君と出逢うのも

全て仕組まれたことなんじゃないだろうか。

呪われたピエロとハジマリの音（前書き）

はじめまして

初めて書く作品ですので

生温い目で大目に見てやってください。

呪われたピエロとハジマリの音

―それは、過去と未来の狭間
現在(イマ)を生きた少年が出逢った
悲しき定めの物語

＃ＣＯＮＴＥＮＴＳ１　―呪われたピエロとハジマリの音―

歴史は回る、廻る。
夢の中の世界が創造されたものなら、この世界は誰が創ったの？

夏休み、僕は暇つぶしに出かけた。友達の拓哉(たくや)と遥(はるか)に連れられて普段はつかったことのない路地裏の探索。細く入り組んだ路地が多いこの街では、通常は大通りを使うから路地裏なんてほとんど入ったこともなかったから。・・・そう、暇つぶしだったんだ。
しばらく適当に進み続けた。右も左も、東西南北はもう分からない。
「なぁ、湍(はやせ)」
先頭を歩いていた拓哉が足を止めた。
「なんだよ？」
「ここ、どこ？」
「は？」
遥も不安そうに辺りを見渡している。冗談じゃない、ハナシが違う。

「おい、拓哉。お前昔この辺に住んでたから路地には詳しいんじゃなかったのか？」
そう聞いたからついてきたんだ。
「いや、意外と忘れてるもんだよなぁ」
拓哉は淡々と答えてなおも先へ進もうとしている。遥はただ黙って携帯を取り出した。
「あぁー！　携帯かぁー」
拓哉も遥にならって携帯を開く。しかし二人とも画面を見つめたまま行動を起そうとしない。
「どうした？」
痺れを切らして湍が聞くと遥が画面をこちらに向けている。
「・・・圏外？」
電波表示には圏外の文字。残念ながらこんな路地のなかＧＰＳ機能は役に立たない。三人は互いに顔を見合わせた。しばらく話し合った結果、じっとして誰かが通るのを待つよりも、とりあえず先に進みどこかの道に突き当たる可能性にかける方にまとまった。
・・・・・・思えばこの選択が、僕の運命を大きく変えたのかも知れない。

僕たちは歩いた。もう何分歩いたのだろう。とにかく進み続けた。こうして歩いていれば、いずれは大きな道に出られるかもしれない。ほとんど賭けだったけど、それでもやらないよりはましかもしれないから。
奥に行くにつれて枝分かれしていた道がまとまりだして、やがては一本の道になった。ずいぶん長いことこの道にいたせいか、歩いてきた道が歪んで見えてくる。代わり映えのしない風景に目が慣れきってしまっていた。ひたすら道を進んでいくと突き当たったのはどこかのお屋敷。
「・・・・・・おい湍、変なトコ出ちゃったよ。どうする？」
「変なとこじゃないよ？　古本屋みたいだ。」

屋敷の正面に“ｓｅｃｏｎｄｈａｎｄ　ｂｏｏｋ”と看板が掛かっている。

「いらっしゃいませ」

#ＣＯＮＴＥＮＴＳ２　―壊れたおもちゃ箱―

「・・・っ！」

屋敷の観察もそこそこに、振り返った僕たちを見下ろすようにそこに居た彼は、真っ黒な燕尾服にシルクハットをかぶった銀髪の男だった。反応しきれていない僕らを追い越して、男は屋敷の扉を開き訊ねる。

「お入りにならないのですか？」

男の口元が細く弧を描く。僕らは互いに再び顔を見合わせた。

「・・・なぁ、湍。行ってみようぜ」

拓哉の言葉に遥は目を見開く。

「だって、携帯が圏外で、俺たち外と連絡ができねぇんだ。中で電話とか貸してもらおうぜ」

二人の顔色を伺いながら話す拓哉の声はだんだんと小さくなっていった。遥は助けを求めるように湍を見る。その様子を見た拓哉も視線を湍に向けた。

「そうだな・・・」

拓哉の提案は無謀（むぼう）な気もした。でもここで引き返してもきっと、またここに戻ってきてしまう。湍はそんな気がしてならなかったのだ。

黙って男の後につく。招かれた先にあったのは数千冊の本を収納しているであろう、四方を囲む巨大な本棚だった。
「ここに置いてあるのは歴史の闇に葬り去られた書物の数々」
男の説明を聞きながら各々適当な本を手に取る。ふと、男の口元が緩んだのを湍は見逃さなかった。
「私の名はボスター」
「ボスター？」
「日本人に見えますか？」
拓哉の言葉を遮るようにボスターが答える。拓哉は一瞬ボスターを睨み付けたがすぐに冷静を取り繕った。
「それで？　嘘つきさん、僕たちに何か用があったの？」
すかさず返した湍の声にボスターの眉が寄る。
「ボスターって英語で嘘つき、って意味だろ？」
拓哉も遥も緊張した面持ちで二人をただ見つめている。
「よくご存知で」
ボスターは相変わらず薄気味悪い笑いを浮かべている。
「用がないなら電話を貸してほしいんだけど」
湍はその笑いがどうしても好きになれなかった。しかしボスターは動こうとしない。
「失礼ですが、この屋敷には外部と通信できる機器は設備しておりませんので」
これじゃぁ屋敷に寄った意味が無い。踵を返し湍は出口へと向かった。それを見た拓哉と遥も慌ててついていく。
「・・・何のつもりだよ？」
ところが今しがた入ってきた扉には鍵が掛かっていて出て行くことができない。ボスターの口角がまたしてもつりあがる。
「何のつもりも？」
勝ち誇った表情でこちらを見つめるボスターに湍は殺意さえ覚える程だった。
「・・・・・・いいじゃん湍、どうせ本屋に来たんだしさ。ここ面

白そうな本がいっぱいあるぜ？」
「そうだよ湍・・・・・・、ちょっと寄ってこ？」
さっきまで不安の色が滲(にじ)んでいた二人が嘘のように平然と本棚へと向かっていく。
「え？　お前ら・・・？」
扉の前には湍とボスターだけが取り残された。
「お連れの方々は本に興味がおありのようで」
ボスターの真っ直ぐな瞳が湍を捉える。湍も負けじと見返す。沈(ちん)黙(もく)はしばらく続いた。

「（やっといらして下さった）」
沈黙を破って聞こえてきた声。しかし違和感があった。
「・・・・・・？（なんだ？）」
慌ててボスターを見ても口元は変わらず薄笑いを浮かべたまま。
「（ずっとお待ちしておりました）」
声が、直接頭の中に響いてくる。
「（こちらへどうぞ）」
ボスターは軽く会釈をすると奥の部屋へと湍を促した。どういう仕掛けかは分からないけど、どうやら声の持ち主はボスターらしい。湍は黙ってその指示に従った。
通されたのは巨大な本棚が一つだけ置いてあるだけの殺風景(さっぷうけい)な部屋。
「貴方なら、開けられるはずです」
本棚にはジャンルも著者も大きさもバラバラな本が数十冊。ずいぶん誰にも読まれていないらしくだいぶ埃をかぶっている。これといって違和感(違和感)のないどこにでもあるような本棚だったが、一つ湍には気になることがあった。下から数えて六段目、ちょうど湍の目線の高さの棚だけ妙に冊数が少ない。他の棚には端から端まできっちり並んでいる本が、その棚にだけ十冊しか入っていなかった。そもそも開けるってなんだ？　周りを見渡しても扉はさっき自分が入っ

てきたひとつだけ。
「開けるって何を？」
考えることをやめて湍はボスターに向き直る。
「貴方が一番ご存知のはずです」
ボスターが何を思ってそんなことを言っているのかこのときの湍には分からなかった。分からないから聞いたのに、その答えは既に自分が知っている。そんなナンセンスなことなんて無い。
もう一度本棚へと向き直る。
「・・・・・・いかれ帽子屋は言いました」
突然ボスターが呟く。
「この世界に必然があるのならば偶然が一致する。しかし必然を生み出すのもまた、偶然なのである。と」
「それが、なんだ・・・？」
「いえ、何も」
彼は湍を試している。ただ静かに。多くを語らず、黙したままに。

―歯車が回りだした
この世界の必然を生むべき　偶然の連なりをまた
必然で生み出すために―

必然が重なった。偶然が重なった。
本棚に一歩歩み寄る。タイトルなんてバラバラだ。『スイカの育て方』、『不可思議は世界地図』、『のらねこのワルツ』、どれもこれも統一されているものなんて見当たらない。
ボスターの残したヒントは曖昧だった。偶然や必然は今の湍にとってはどうでもいいことなのだ。彼はここに来て、ボスターと出会った。それが事実なら、湍はそれを受け入れる。ただそれだけだ。

相変わらず本棚とにらめっこを始めて、もうどれほどの時間が経ったのだろうか。ボスターの言葉を思い返してみる。あのとき彼は確かに言った。いかれ帽子屋、と。湍はその名に聞き覚えがある。しかしそれが本当に答えであるのなら、このパズルは実に簡単すぎた。

―不思議の国のアリス

気がつくのにさほどの時間はかからなかった。先程から眺めている十冊の図書。初歩的なアナグラムだ。並んだ本のタイトルの頭文字を並べかえると「ふしぎのくにのありす」とすることが出来る。

「ボスター」

それまで口を閉ざしたままだった湍が呟いた。

「お呼びですか？」

予想通りの細い笑みを浮かべてボスターは確かにそこに居た。

「これは本当にただのアナグラムか？」

単刀直入（たんとうちょくにゅう）に言ったその質問でもボスターにはお見通しのようだ。

「貴方の思うことを、貴方の思うままに」

それきりボスターは何も言わなかった。いや、何も言えなかったのかも知れない。それはただの直感だが、そのときの湍は自分を動かしているのがこのボスターではなくほかの誰か、言うならば黒幕というものはまた別のところに居るのではないかと思い始めていたのだ。その黒幕の前ではもしかしたら、ボスターすらチェス駒の一つなのかもしれない。

湍は確信した。このアナグラムは、こんなにも簡単なものでもいいのだ、と。

本棚の本を手にする。手順を考える必要などない。いかれ帽子屋の言うようにこの世のすべての偶然が必然の一致であるのなら自分の一言一動も決められているはずだから。だからできるだけ何も考えずに本を移動する。

最後の本を並び変えたとき、何かが外れたような鋭い金属音とかすかに響く地面のゆれが始まるのと共に本棚は下に沈みだした。ち

ょうど本棚の上底が床と重なったとき。そこには巨大な扉が現れる。
天井まで届く真っ黒な扉。今まで本棚の存在によって隠されていた隠し扉。扉を開こうとした手は虚しく宙を掻き、それは重たい音を立てながらひとりでにゆっくりと道を開いた。進むことを拒(こば)んだ足は動こうとしない。この先に進んでしまえば世界が、少なくとも湍の世界は完全に道を反れてしまう。直感だった。扉の向こうは石でできた通路が続いているのが見える。湍はボスターに助けを求めることはしたくなかった。今彼に助けを求めたならば彼は確実に湍をこの先に進めたがるだろう。かといって湍はもう退くことはできなかった。彼の頭の中にはあの言葉しかもはや廻っていなかったのだ。
「・・・・・必然が偶然を生み出し、偶然は必然を生むんだろ？」
静かに彼は呟いた。ボスターはその言葉が聞こえていたのか、小さく頷く。
そう、最初からこうなることは決まっていたんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3565m/

phantom

2010年10月9日12時03分発行